
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 仔細《しさい》らしく

四月十一日。

甲府のまちはずれに仮の住居をいとなみ、早く東京へ帰住したく、つとめていても、なかなかままにならず、もう、半年ちかく経ってしまった。けさは上天気ゆえ、家内と妹を連れて、武田神社へ、桜を見に行く。母をも誘ったのであるが、母は、おなかの工合《ぐあ》い悪く留守。武田神社は、武田信玄を祭ってあって、毎年、四月十二日に大祭があり、そのころには、ちょうど境内の桜が満開なのである。四月十二日は、信玄が生れた日だとか、死んだ日だとか、家内も妹も仔細《しさい》らしく説明して呉《く》れるのだが、私には、それが怪しく思われる。サクラの満開の日と、生れた日と、こんなにピッタリ合うなんて、なんだか、怪しい。話がうますぎると思う。神主さんの、からくりではないかとさえ、疑いたくなるのである。

桜は、こぼれるように咲いていた。

「散らず、散らずみ。」

「いや、散りず、散りずみ。」

「ちがいます。散りみ、散り、みず。」

みんな笑った。

お祭りのまえの日、というものは、清潔で若々しく、しんと緊張していていいものだ。境内は、塵一つとどめず掃き清められていた。

「展覧会の招待日みたいだ。きょう来て、いいことをしたね。」

「あたし、桜を見ていると、蛙《かえる》の卵の、あのかたまりを思い出して、」家内は、無風流である。

「それは、いけないね。くるしいだろうね。」

「ええ、とても。困ってしまうの。なるべく思い出さないようにしているのですけれど。いちど、でも、あのかたまりを見ちゃったので、」離れないの。」

「僕は、食塩の山を思い出すのだが。」これも、あまり風流とは、言えない。

「蛙の卵よりは、いいのね。」妹が意見を述べる。「あたしは、真白い半紙を思い出す。だって、桜には、においがちっとも無いのだもの。」

においが有るか無いか、立ちどまって、ちょっと静かにしていいたら、においより先に、あぶの羽音が聞えて来た。

蜜蜂の羽音かも知れない。

四月十一日の春昼。

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：増山一光

校正：小林繁雄

2005年2月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。